

提 言 書

2022年8月

八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議

目次

1	はじめに	3
2	政策提言の方向性について	4
3	提言	
	政策の柱1	10
	「わたしが育ち、わたしが育てる18年」のため、 親には経済・子育て支援、子には体験支援	
	政策の柱2	13
	「わたしが育ち、わたしが育てる18年」の 知りたい情報、共感したい想いをデジタルで	
	政策の柱3	15
	「わたしが育ち、わたしが育てる18年」にあわせて、 中心街や街並みを再デザインする	
	政策の柱4	18
	「わたしが育ち、わたしが育てる18年」を 大切にする意識をみんなでつくる	
4	ネットワーク会議で出た施策例	20
	—資料編—	
	・委員名簿	25

1 はじめに

総務省が公表している、2022年1月1日時点の住民基本台帳に基づく人口動態調査によると、2022年の日本人の人口は、約1億2,322万人で、前年から約62万人の減と、13年連続の減少となっています。また、東京圏（東京、埼玉、千葉、神奈川）においても、前年比約3万5,000人減の約3,561万人で、記録がある1975年以降で初めて減少に転じました。

八戸市も例外ではなく、国勢調査（外国人含む）における当市の人口では、平成7年の約24万9千人をピークに減少を続けており、令和2年は約22万3千人と、特に少子高齢化の進行と人口流出によって、若い世代の人口が減り続けている現状であります。人口減少に対して何も手を打たなければ、地域活力の低下を招き、それが地域経済の縮小につながり、社会資本の老朽化や行政サービスの質の低下がまちの魅力低下を招きまします。逆に言うと、魅力あるまちには、若者や女性が残る、賑わいが生まれ、それが人口の流出を食い止め、更なる賑わい創出につながると考えられることから、まちの魅力を高めていかなければなりません。

そのような中、八戸市では、市の未来を担う若者や女性にとって魅力あるまちづくりを推進することで、地域社会に活力を生み出し、多様な人材が活躍できる地域社会の形成を図ることを目的に、令和4年4月に「八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議」（以下、「ネットワーク会議」とする。）を立ち上げました。私たち委員10名は、ネットワーク会議の委員の委嘱を受け、これまでに6回の会議を開催し、委員同士での意見交換やグループワーク、まち歩きしながらのアイデア出し等、様々な視点や角度から議論を重ねてきました。

また、若者のニーズを把握するため、八戸市が実施した「若者意識調査」アンケートの調査結果から得られるデータに基づき、政策提言の内容を検討いたしました。

約半年間という限られた時間の中での議論ではありましたが、私たちのまちが今よりも魅力的なまちになっていく仕組みづくりに向けて、これまで培ってきた知見や人的ネットワーク等を活用しながら、政策提言としてまとめあげました。この提言は、行政のみならず、市民や地域企業、団体など「オール八戸」で取り組んでいただきたい内容を盛り込んでいます。

八戸市の明るい将来の実現には、若者や女性が住みたいと思えるまちづくりが必要です。私たちの提言が、ひとつでも多く市の施策として取り入れられ、若者や女性が魅力を感じられるまちとして発展していくことを願い、次のとおり提言いたします。

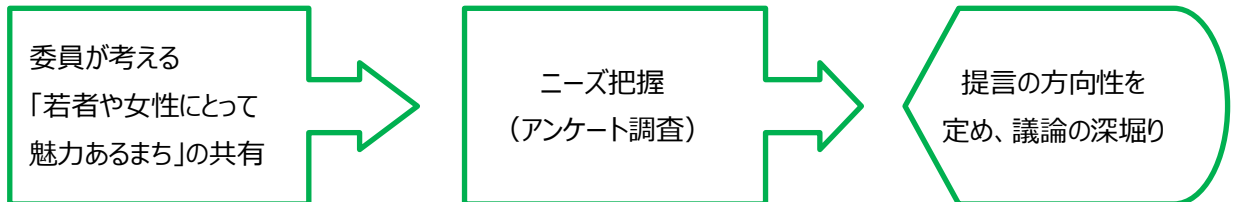
2 政策提言の方向性について ～若者や女性にとって魅力あるまちとは～

政策提言にあたり、若者や女性にとって魅力あるまちづくりは、様々な分野や広範多岐にわたる取組が必要となるため、当ネットワーク会議においては、ある程度の方向性を定めた上で議論の深掘りをしました。

■ 政策提言のターゲット

「若者」については、法律上定められた年齢区分はないものの、国が策定する「子供・若者育成支援推進大綱」を参考にし、概ね、40歳以下の男女をターゲットとした政策提言とする。

■ 政策提言の方向性を定めるプロセス



■ 委員が考える「若者や女性にとって魅力あるまち」の共有（仮説）

私たちが出した意見を分野ごとに大きくくり化すると、「シビックプライド」、「子育て」、「賑わい創出」、「人材還流」、「仕事」、「その他」に分類することができた。



また、若者や女性にとって魅力あるまちの実現に必要なことについても意見出しを行い、上記の分類に横串を通す形で整理を行った。

	シビックプライド	子育て	賑わい	人材還流	仕事	その他
情報発信	若者や女性が興味あることに人を集めて、みんなが楽しんでいることをSNS等で発信 小さな子供連れがゆとり食事できる店舗の情報やベビールーム等の情報の一覧化			中高生向けの情報発信		
デジタル	町内会のデジタル化 忙しい子育て中の方でも、必要な情報をすぐ見つけられるようなシステムづくり（バーコードリーダーの活用等）					
仕組み・体験づくり		子供のために使える休日を与える企業等に補助金を出す等の支援 子ども同士の結びつきの維持		学んだ成果を地域に活かす体験作り（教育と地元企業とのコラボ） サマーキャンプやインターンなど、若い学生が地域の職業を知る機会づくり		
	教育課程の中で、子どもたちの体験の機会を増やす					
デザイン	何かあると予感させるデザイン、統一された綺麗で安心感のあるデザイン、広義と狭義のデザイン、視覚のデザイン					
八戸圏域	八戸圏域で連携し、単発ではなく継続的に人のつながりが維持・発展していく仕組みづくり、圏域単位でまちの課題を解決していくアプローチ					
意識・視点	意識・仕組み・政治参画 市の外側からのエネルギーをどう生かしていくかが重要 まちの仕組み自体を見直すような視点が必要					

■ ニーズ把握（アンケート調査）

市内に住む18歳以上40歳未満の男女を無作為に抽出した1,000名を対象に、八戸市が実施した「若者意識調査」アンケートをもとに、ニーズの把握を行った。

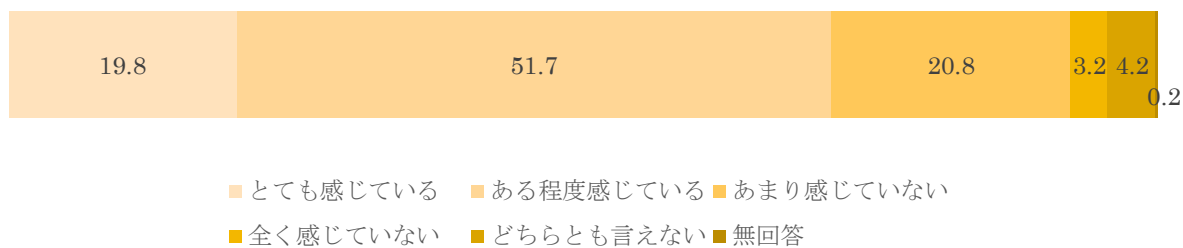
アンケート調査結果では、八戸市に愛着や親しみを感じている人の割合は7割を超え、住みやすさを感じている人も7割弱を占めた。また、市が注力すべき施策として最も多かったのが、ハード面が「若者向けのショッパや飲食店が集まる施設の整備促進」(62.1%)、ソフト面では、「子育て支援の充実」(43.6%)であった。

アンケート調査結果から見てきたものとして、若者の地元定着にも子育て環境が重要とする声が多いなど、子育て支援に関する充実を求める若者が多かったことが見えてきた。

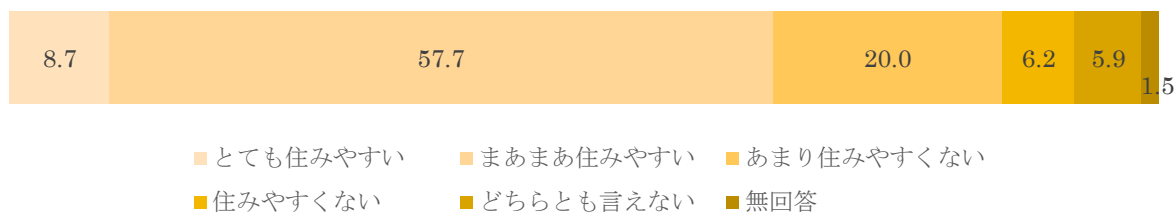
【若者意識調査】アンケートの調査概要

- ・調査地域：八戸市内
- ・調査対象者：市内に住所を有する18歳以上40歳未満の男女1,000名
- ・調査方法：アンケート調査票を郵送送付し、WEB回答及び郵送回収により実施
- ・調査期間：令和4年6月4日～6月20日
- ・回収状況：回収数404件、回収率40.4%
- ・実施主体：八戸市

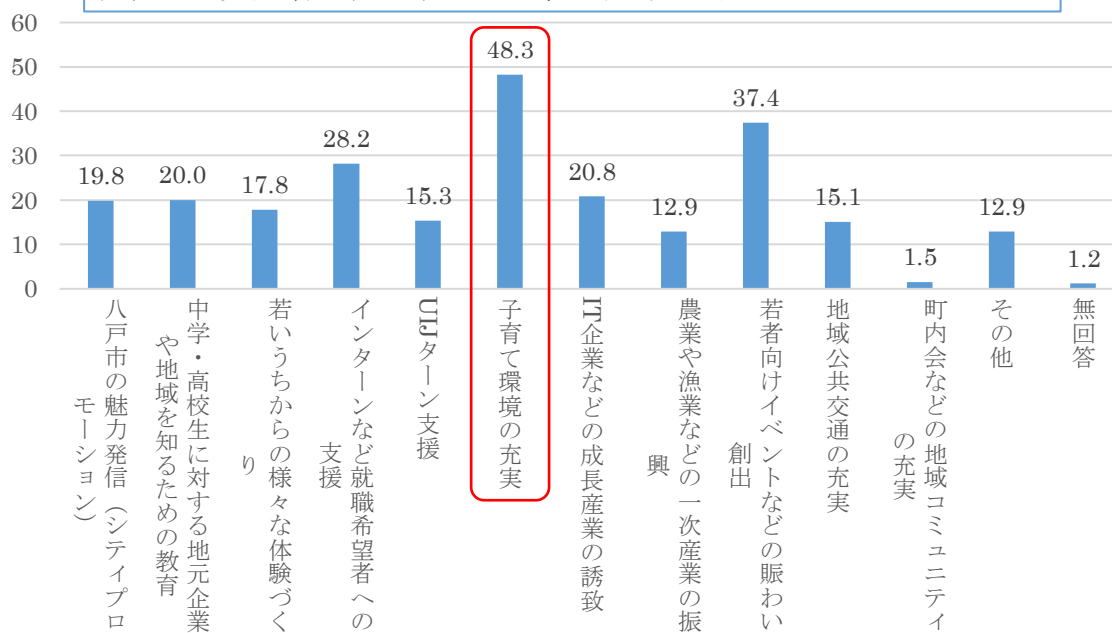
八戸市に愛着や親しみを感じていますか？



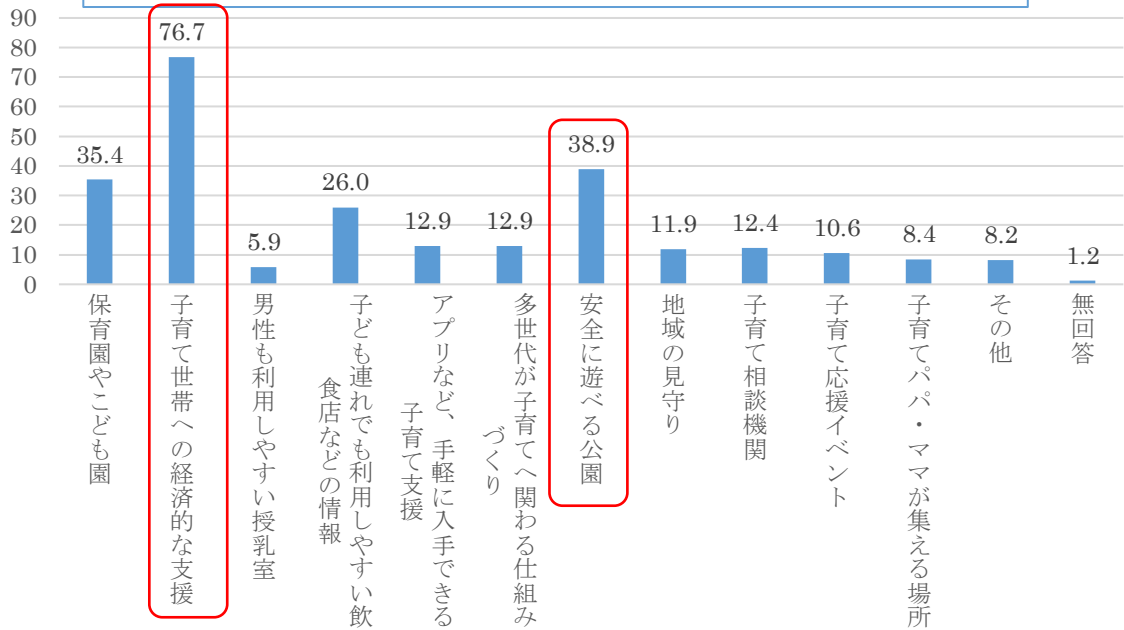
八戸市の住みやすさは、どのように感じていますか？



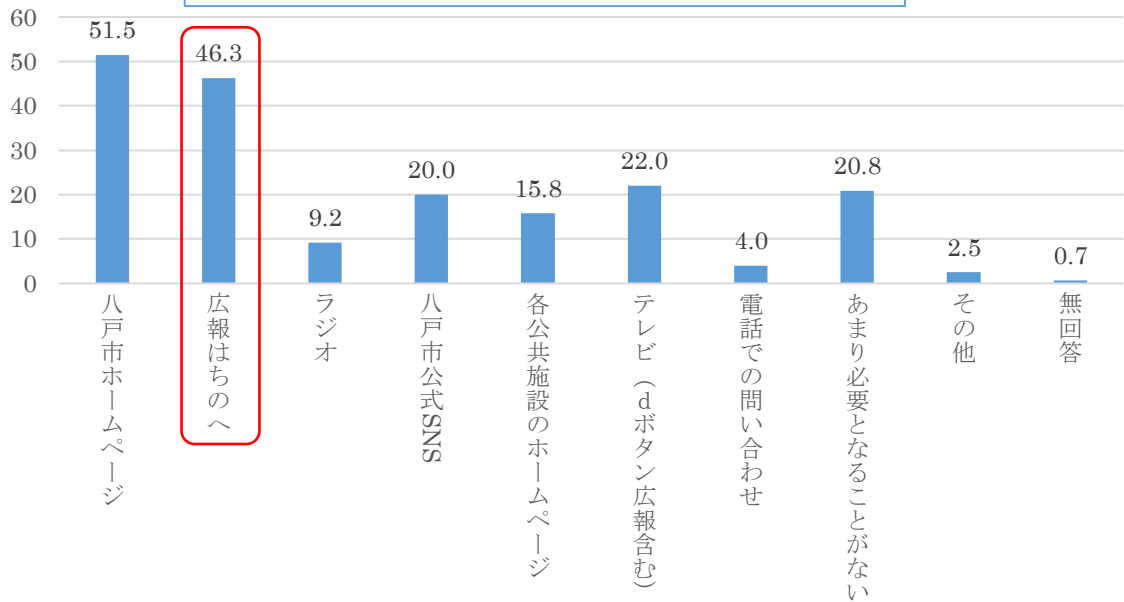
若者の地元定着を促進するため、八戸市が力を入れるべきことは？



子育てを考える上で、八戸市がより充実させた方が良いことは？



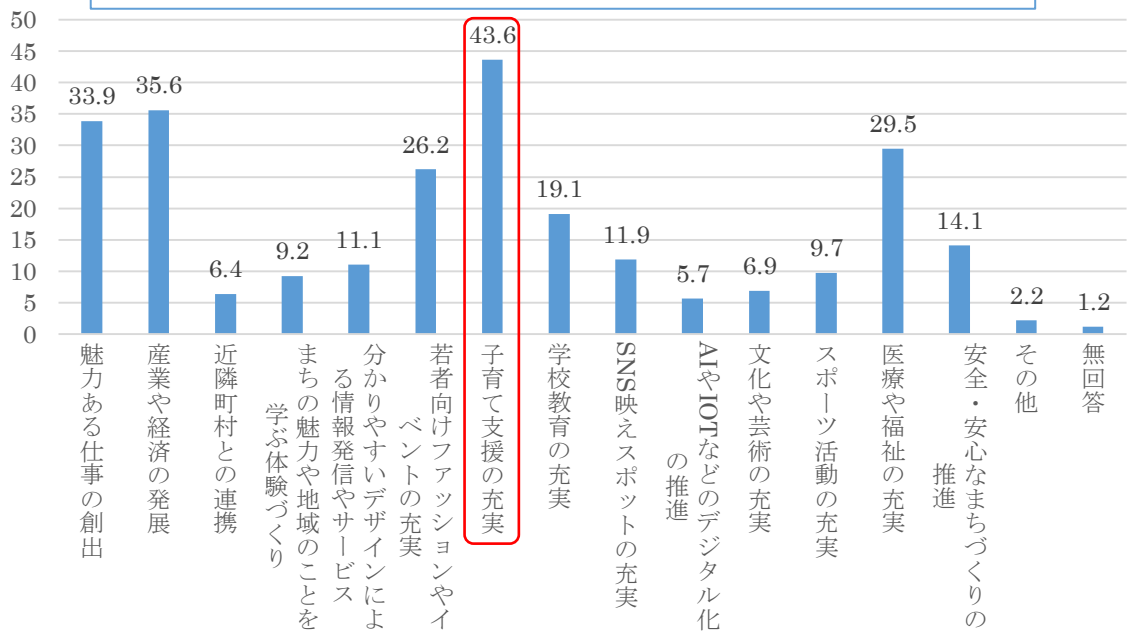
八戸市の行政情報は、どのように入手しますか？



ハード面（施設や設備等）で、八戸市が力を入れるべきことは？



ソフト面（取組や活動等）で、八戸市が力を入れるべきことは？



■ 提言の方向性について

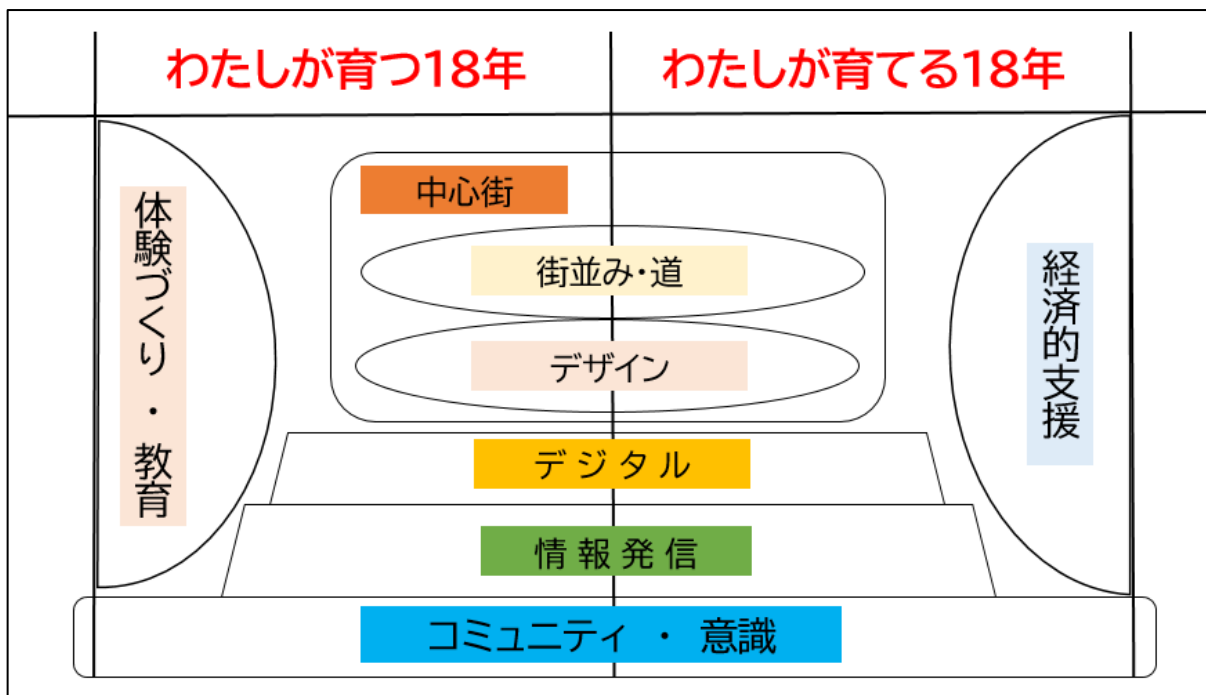
以上のことから、ネットワーク会議では、「子育て」を切り口とした政策提言とすべく議論を行った。子育てといっても、今までの市の子育て施策は、子育てをする「親」の視点からの取組が多かったが、育っていく「子」の視点からの取組は少ないように感じる。子が育つ18年間において、地元のことをもっと知り、地元で様々な体験をし、地元のことがもっと好きになってもらうきっかけを作っていくことが、愛着や誇りの醸成のために必要なのではないか。そのように育った子どもは、将来、自分が親世代になる18年間において、地元で子育てをしたい、子どもに地元を好きになってもらいたいと思うでしょう。

子が育つ18年間、子を育てる18年間、この18年間の好循環によって、若者や女性にとって魅力あるまちを形づくっていけるものと確信している。

☆令和4年度政策提言のテーマ☆

【わたしが育ち、わたしが育てる18年】

【イメージ図】



3 提言

以上の内容を踏まえ、「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」をテーマに、大きく 4 つの政策の柱に分類し、その政策の柱ごとに、行政や地域企業、団体などが取り組むことが必要な施策を提言としてまとめました。

政策の柱1 「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」のため、 親には経済・子育て支援、子には体験支援

【子を育てる親の日常を、気分を変える】

- 【提言①】 ちゃんと伝わる **#インパクトがある経済支援** で、励まそう
- 【提言②】 市民全員で準備して **#子育て世代が助けを求めやすく** しよう
- 【提言③】 地域ぐるみ、全世代ぐるみで、**#子育て世代に家を届けよう**
- 【提言④】 **#子どもと時間を過ごせる柔軟な働き方** を実現しよう

【八戸らしい体験に満ちた 18 年で、八戸を心に刻んでもらう】

- 【提言⑤】 **#自然を生かしたアクティビティ** で、子どもの心と体を育てよう
- 【提言⑥】 **#圏域との交流イベント** で、ディープな地元を感じてもらおう
- 【提言⑦】 日々の暮らしでは得られない **#たくさんの生き方・働き方に触れる体験** を

【提言①】 ちゃんと伝わる **#インパクトがある経済支援** で、励まそう

八戸市は、子育てについての経済的支援をすでに継続的に行っています。しかし、子育て中の皆さんの実感としては、支援を受けているという感じが薄いのが実情です。このすれ違いが起きている原因は、現状の支援内容にインパクトが足りないため、話題にならず認知が上がっていないことが原因ではないでしょうか。

八戸市は子育てを大切にしているんだ、本気なんだと明確に伝わるような大きな施策がひとつあるだけで、経済的な面のみならず、気持ちの面でも子育て中の皆さんを応援できるようになります。二次的効果として、八戸が全国的に「子育てのまち」として有名になることも期待できます。

【提言②】 市民全員で準備して **#子育て世代が助けを求めやすく** しよう

子どもを抱えたお父さんお母さんは、いつだって不安と戦っています。わたしの育て方は間違っていないか？子どものシグナルを見過ごしていないか？どのようにしつけをしたらよいか？自らの限界まで、子育てに心身のエネルギーを注ぐ子育て世代に、私たちができることは何でしょうか？

それは、お父さんお母さんが周りに助けを求めやすくすること。そのために、周りがいつも心づもりをしておくこと。つながる準備を整えておくこと。行政サービスはもちろんのこと、市民全員がそんな気持ちを持てた時、八戸の子育ては理想に大きく近づくでしょう。

【提言③】 地域ぐるみ、全世代ぐるみで、 **#子育て世代に家を届けよう**

子を育て、子が育つベースとなるのは、家です。家でリフレッシュできるからこそ、子は学校で学び、親は仕事に打ち込むことができます。しかし、家にはお金がかかるもの。個々の家庭も行政も、簡単には解決できないでしょう。

だからこそ、子育て世代に家を届けるために、全ての世代を巻き込んで地域のリソースを効率的に活用していく必要があります。

【提言④】 **#子どもと時間を過ごせる柔軟な働き方** を実現しよう

我が子にひとつでも多くのことを教えたい、一緒に豊かな時間を過ごしたいと思わない親はいません。しかし、昭和から続く「9時17時（くじごじ）」「休みは日祝」という固定的な就業形態や、「残業するのが当たり前」といった働き方では、どうしても子どもと過ごす時間が限られてしまいます。今も多くの家庭で、子育てと仕事の両立が難しい現実が続いているのではないのでしょうか。

子育て世代に「子育てと仕事は両立するのだ」と信じてもらうために、八戸だからこそその働き方改革を進める必要があります。

【提言⑤】 **#自然を生かしたアクティビティ** で、子どもの心と体を育てよう

子どもが育ち、社会に出てから絶対に必要となるのは、心の豊かさと体力。加えて昨今では、自然科学や STEAM 教育の重要性が叫ばれています。そこで、幼少期から自然と親しみ、野山を駆け回り、生き物と触れ合う体験が重要となってきます。自然はまさに自然科学の基礎です。

そう考えてみると、八戸は圏域を含めまさに現代の教育にうってつけの場所であることが分かります。その強みを活かさない手はありません。

※STEAM 教育・・・Science (科学)、Technology (技術)、Engineering (工学)、Art (芸術)、Mathematics (数学) の5つの単語の頭文字を組み合わせた、今後の IT 社会に順応した人材を育てていく教育概念

【提言⑥】 **#圏域との交流イベント** で、ディープな地元を感じてもらおう

八戸で生まれた子どもは18年の間、親か学校が連れて行った場所しか知りません。そんな18年を過ごした結果、地元の良さが理解できなかったとしたら、なんともったいないことでしょう。特に八戸市は、半都半邑（はんとはんゆう）などころがあって、いかにも地方・田舎といった体験をさせるには十分とはいえません。

八戸市で体験できないことは、素直に圏域町村の力を借りましょう。圏域町村と協力し、様々な交流を通じて一緒に子どもを育てましょう。八戸が力を貸せるところも、きっとあります。

※半都半邑（はんとはんゆう）・・・半分都会で、半分田舎を表す造語

【提言⑦】 日々の暮らしでは得られない **#たくさんの生き方・働き方に触れる体験** を

未来をひらくのは子どもです。しかし子どもは、あらゆる未来を実現できるわけではありません。想像できる未来しか実現できないのです。子どもの想像力を狭めてはいけません。子どもたちを社会の都合で日々の暮らしに閉じ込めるのではなく、逆に解放しなければいけません。

子どもたちの未来に関わる仕事のこと、他のまちのこと、政治参加のこと。そのほか、あらゆる体験を提供するための手立てを講じましょう。

政策の柱2 「わたしが育ち、わたしが育てる18年」の 知りたい情報、共感したい想いをデジタルで

【みんなが常に子育ての情報に触れている社会をつくる】

【提言⑧】 今日どこかに行けそうだと思うきっかけに、[#子育て情報一元化](#)

【提言⑨】 みんな読んでいる [#広報はちのへを子どもも読むメディアに](#)

【スマホで自然に、心地よくデザインされた情報に触れる】

【提言⑩】 親子がスマホを持つ当たり前の時代、[#八戸市にデジタルで触れる](#) 体験を

【提言⑪】 デザインと編集のちからで [#八戸市に住むUXを設計](#) しよう

【提言⑧】 今日どこかに行けそうだと思うきっかけに、[#子育て情報一元化](#)

子どもをどこかに連れて行きたいけれど、行けそうな場所が分からない。買い物ついでに、家にいてばかりの子どものストレスを発散させたい。スマホで調べようとしても、施設ごとに縦割りされた情報で検索しにくいし、イベント情報も古いものしかひっかからない。市民は「八戸あたりの、今の」情報が欲しいのに。ここは一度、インターネットの基本に立ち返りましょう。

子育て情報を一元化し、八戸近郊で今出かけられる施設について横串検索を可能にする。特に小さなお子さん連れの親子が行ける場所を洗い出し、整理し、ここなら行けますよとリコメンドする。情報を整理することで、ユーザーは自然とたくさんの施設を比較するようになります。ひいては、親子を受け入れる企業側の意識を変えることにもつながるかもしれません。

【提言⑨】 みんな読んでいる #広報はちのへを子どもも読むメディアに

八戸市の政治・経済・インフラなどの情報に加え、助成や補助、イベント情報などを紙という安定感のあるメディアで読める広報はちのへは、市民から厚い支持を得ています。しかし、読んでいるのは大人がほとんどという問題点もあります。いや、問題点というよりは、とにかくもったいない！

ひと昔前のおもちゃ屋さんのチラシのように、子どもたちが真っ先に読み始めるメディアになれば、きっと親子のコミュニケーションの役に立てるでしょう。たくさんの生き方があることを子どもたちに知らせるメディアになれば、きっと親子で将来に向けて動き出せます。

【提言⑩】 親子がスマホを持つ当たり前の時代、#八戸市にデジタルで触れる 体験を

一人一台スマホを持つ時代になり、スマホはもはや趣味・嗜好ではなくインフラとなり、スマホで見られない情報は無いものと同じとも言える状況です。言ってみれば、八戸市広報のライバルはスマホです。

一方で、スマホはライバルでありながら仲間でもあります。スマホを通じて、スマホのような感覚で八戸市に触れてもらえたら、特に若者・女性に効果的に情報を届けることができます。もはやデジタルネイティブ世代は、親の世代まで広がっていることから、親子の18年にもデジタルは必須です。

【提言⑪】 デザインと編集のちからで #八戸市に住む UX を設計 しよう

若者を対象にしたアンケートで、八戸市の魅力を尋ねてみました。多くの若者が、八戸に愛着を持って暮らしていることが分かりました。しかし、興味深いことに、八戸に対するポジティブな気持ちを具体的に表現できる人は少ないのです。

八戸には無数の魅力があります。それらをただリストにして伝えるのではなく、市民（ユーザー）それぞれに寄り添いながら伝え、体験してもらおう。そんなコミュニケーションを、UXの力で実現させましょう。重要となるのは、デザインと編集です。

※UX・・・User Experience（ユーザー エクスペリエンス）

ユーザーが商品やサービスを通じて得られる体験のこと

政策の柱3 「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」にあわせて、 中心街や街並みを再デザインする

【親子が集い、学ぶ場としての中心街へ】

【提言⑫】 教育機能・設備を集約し、[#親子で新しい何かを学ぶ中心街](#) へ

【提言⑬】 気配や予感を漂わせて、[#「何かやってらよ」がある中心街](#) を実現しよう

【提言⑭】 車で、子連れで、赤ちゃん連れで。[#親子がぶらりと行ける中心街](#)

【家の外にいる、まちに行く市民を増やす】

【提言⑮】 歩道を直し、季節に打ち克ち、[#歩く、まち行く市民に市民権を](#)

【提言⑯】 市民で賑わっているから、[#子ども一人で遊びに行かせられる公園](#) になる

【提言⑫】 教育機能・設備を集約し、[#親子で新しい何かを学ぶ中心街](#) へ

寂しいことではありますが、中心街はかつての商業の中心地としての役割がずいぶんと小さくなってしまいました。郊外の大規模商業施設との棲み分けも考えなければなりません。「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」というテーマを掲げながら、中心街の新しい役割について考えれば、自ずと答えは見えてきます。

すなわち、親子が集い、学ぶ場所としての中心街です。

あまねく市民に教育機会を提供し、個性を育て、未来の可能性をひらくこと。そのためには、親が親同士、子が子同士で同じ立場の人とコミュニケーションをすることが大切です。昼は小さな子どもたちが、夕方は交通機関乗り換えの高校生たちが、夜は若者が。もしかすると、学校の先生たちも。それぞれ中心街に集い、語らい、新しい何かを学び、持ち帰る。中心街がそんな場所になることを想像してしまいます。

【提言⑬】 気配や予感を漂わせて、#「何かやってらよ」がある中心街を実現しよう

車で中心街に差し掛かると、市民はたいてい「人が出ている」「出ていない」と言い、イベントが開催されていれば「何かやってらよ」と言います。家に帰っても「何かやってらったよ」と言います。なんだかとても八戸らしい、おだやかな日常に思えます。しかし、逆に言えば、何もイベントをやっていなかったら、話題になることはありません。

八戸は市（いち）が盛んなまちです。人が集まって何かをしていれば、気になって行きたくなるというもの。そんな「何かやってらよ」感が、今の中心街には不足しているように思えます。どっしり構える店舗も大切ですが、いつ立つか分からない市やイベントの面白さを、中心街の中心に据えたいと思うのです。

【提言⑭】 車で、子連れで、赤ちゃん連れで。#親子がぶらりと行ける中心街

中心街へ行くにも、駐車場が有料だから行けない。大規模商業施設なら小さな子どもを世話する場所や大きなトイレがあるけれど、中心街には少ないから行けない。普段からよく耳にする意見です。今や駐車場や子どもを世話する機能はインフラであって、避けて通れません。

ぶらりと行ける＝車で行ける、子連れで行ける。加えて、ある程度のユニバーサルデザインが施されていて、特に準備なしに行っても不便を感じることがないこと。ここまで実現すれば、親子がぶらりと行ける魅力的な場所と思ってもらえます。さらには、最も外に出るのがためらわれる赤ちゃん連れの親子がのんびりできる場所があれば、中心街独自の価値となるでしょう。

【提言⑮】 歩道を直し、季節に打ち克ち、#歩く、まち行く市民に市民権を

若者にアンケートをとった結果、歩きやすい歩道の整備を望む声が一定数ありました。ちょっと散歩したくても、親子で近場に出かけたくても歩くのをためらってしまうかもしれません。一方、同じアンケートでは「気候が良い」との回答も多かったのも、まとめると「八戸は気候が良いが歩道が悪く散歩しにくい」と感じる人がいるものと考えられます。外へ出て、まちを歩きたくなる気持ちになってもらいたいものです。

特に小さな子どもにとって、まちを歩くことは心身を育む教育そのものです。まちに人が往来し、あいさつを交わすことは、社会性を学ぶ第一歩。歩きやすいまちをつくることは、子どもが市民の一員になるために極めて重要な体験です。

【提言⑩】 市民で賑わっているから、[#子ども一人で遊びに行かせられる公園](#)になる

家庭や学校・職場とは違う「第三の居場所」という言葉が一般的に浸透してきました。しかし、子どもを連れてカフェに行くにはお金がかかります。市民みんなの第三の居場所、それは公園であってほしい。しかし、たまたま近くによく整備された公園がある家は、さほど多くありません。また、良い公園があったとしても、人が誰もいない寂しい公園に、子どもを行かせることはできません。

市民全員が、気軽に公園にアクセスできること。加えて、公園が賑わっていること。これを実現できれば、小中学生の子育ては一気に変わります。公園の整備は行政の仕事ですが、賑わいは市民の仕事でもあります。市民がつい公園に足を向けてしまうきっかけや仕掛けを設計して、子どもたちの笑いが響く公園を取り戻したいものです。

政策の柱4 「わたしが育ち、わたしが育てる18年」を大切に する意識をみんなでつくる

【市民みんなが、すべての世代が、子どもファーストになる】

【提言⑰】 忙しい親世代を助けたい！だから、**#祖父母の「孫かで」を促進**しよう

【提言⑱】 組織・団体・企業を巻き込んで、**#子どもファースト**を推進しよう

【地域・圏域での連帯】

【提言⑲】 デジタルで、イベントで、**#若者が自然と町内会に入る流れ**を実現しよう

【提言⑳】 圏域の人と経済をつなぎ、**#市民が圏域住民と関係する**手助けを

【提言⑰】 忙しい親世代を助けたい！だから、**#祖父母の「孫かで」を促進**しよう

3世代同居が多かった頃は、「孫かで」といって、おじいさんおばあさんをはじめ、地域で子どもの面倒を見ていました。非常に豊かな子育ての形です。祖父母世代に子どもを見てもらっている分、現役世代も身を入れて働くことができます。しかし、かつて八戸でも見られたそんな子育ての形も、社会や働き方が変わるにより、徐々に減ってきました。

だからこそ、市内に住む祖父母世代が子育てしやすくなるような仕掛けが必要です。親世代の負担を軽減しながら、子に世代を超えた豊かな体験を提供し、すべての世代で子育てに向き合う社会を作りましょう。

【提言⑱】 組織・団体・企業を巻き込んで、**#子どもファースト**を推進しよう

八戸市では、全市一斉530運動を実施しています。530と書いてゴミゼロ、まちの美化運動です。市民が連携してまちを美化するように、今八戸で、市民全員で子育てができれば、どれほど美しいまちに感じられるでしょうか。そのためには、市民や行政の力だけでは足りません。組織・団体・企業の皆さんにも積極的に関与していただく必要があります。

組織・団体・企業に子どもファーストという考え方を理解していただき、広く知らしめる手助けをしてもらいましょう。子育てにかかるお金を社会全体で負担し、親子の18年を彩る民間事業を積極的に八戸に展開してもらいましょう。

【提言⑱】 デジタルで、イベントで、*#若者が自然と町内会に入る流れ* を実現しよう

自治という発想が、若い世代から消えかけています。例えばゴミ出し。ゴミ集積所は誰が準備しているのか、知っている若者は何割いるのでしょうか？社会というものは、国や地方自治体がすべてお膳立てするものではなく、住民自らが作り出すものでもあります。しかし、地域コミュニティのつながりが希薄になっていく中、若者に無理強いもしたくない。では、どうすればいいのでしょうか？

必要なのは、デジタルやイベントを活用することで町内会などの自治活動への参加の敷居を下げること。現代らしい地域とのつながり方をデザインすること。気軽に参加できる機会をつくることです。

【提言⑳】 圏域の人と経済をつなぎ、*#市民が圏域住民と関係する* 手助けを

例えば、八戸市に住んでいるけれど、働いているのは近隣市町村であったり、八戸市で働いているけれど、住んでいるのは近隣市町村であったりします。たとえ八戸だけで「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」にフォーカスしたとしても、圏域で足並みを合わせなければ、その成果は低く止まるでしょう。圏域総出で子育てに取り組む意識を持つことが望まれます。

そのためには、市民が圏域の他市町村の住民とつながりを持つこと。そのきっかけを作るのは、行政の役割です。

4 ネットワーク会議で出た施策例

ここで掲げる施策例については、政策提言を考える中で委員から出された様々な意見やアイデアについて掲載しています。この中から、ひとつでも多くの取組が実現されることを、また、市で既に取り組んでいるものは、その更なる拡充や充実を期待するものです。

政策の柱1 「わたしが育ち、わたしが育てる18年」のため、 親には経済・子育て支援、子には体験支援

【子を育てる親の日常を、気分を変える】

【提言①】ちゃんと伝わる **#インパクトがある経済支援** で、励まそう

- ・子どもの医療費無償化（対象者の拡充・所得制限の緩和）
- ・学校給食費の無償化
- ・2人目以降の保育料無償化
- ・おむつ、ミルク等必需品の無料配付
- ・子どものバス利用料・公共施設入館料等の無料化
- ・出産お祝い金または共通商品券で応援

【提言②】市民全員で準備して **#子育て世代が助けを求めやすく** しよう

- ・訪問ケアの充実
- ・カウンセリングの充実
- ・子育て中のお母さんが参加し交流できるイベントの充実
- ・子育て世帯への理解促進のための行政・企業・組織を対象とした研修の実施
- ・義務教育の中で、子育てについて学ぶ機会の提供

【提言③】地域ぐるみ、全世代ぐるみで、 **#子育て世代に家を届けよう**

- ・子育て世帯への住宅取得支援
- ・高齢世帯の住宅を商品化し、若者・子育て世帯へ流通させる仕組み作り
- ・空き家のあっせんと子育て世帯のリノベーション資金の支援の充実

【提言④】 #子どもと時間を過ごせる柔軟な働き方 を実現しよう

- ・子育て世帯のための短時間勤務・フレックス勤務等の柔軟な働き方の推進
- ・子どものために使える休日の導入促進
- ・子どもの学校行事に親が参加しやすくするための仕組み作り
- ・出産・育児のためフルタイム勤務が難しい場合の雇い止め等を防ぐため、副業・複業の推進
- ・フルリモート移住者への支援と八戸の子育ての流れの解説

【八戸らしい体験に満ちた18年で、八戸を心に刻んでもらう】

【提言⑤】 #自然を生かしたアクティビティ で、子どもの心と体を育てよう

- ・海や山のアクティビティの拡充（親子での釣り体験・農作業体験・里山体験・山菜取り体験など）
- ・親子で参加できる、自然から科学を学ぶイベント等の開催
- ・学校行事として、アクティビティの推進
- ・学校行事として、祭りや伝統行事等への積極的な参加促進

【提言⑥】 #圏域との交流イベント で、ディープな地元を感じてもらおう

- ・圏域の子どもたちが交流するイベントの実施
- ・学校行事で圏域を知る学習機会の提供
- ・地域をつなぐデザインや仕掛け作り（例：ディズニーランドの隠れミッキー）
- ・各市町村の観光部署や観光事業者、VISIT はちのへとの連携による圏域周遊スタンプラリーの導入

【提言⑦】 日々の暮らしでは得られない #たくさんの生き方・働き方に触れる体験を

- ・中高生向け夏休み・冬休みインターンの促進
- ・地元企業を知る体験イベントの開催
- ・首都圏の大学生と市内の小中高生が関わるサマーキャンプの開催
- ・市の施策について、若者との定期的な意見交換の実施
- ・子どもの体験イベント開催に対する補助金の創設

政策の柱2 「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」の
知りたい情報、共感したい想いをデジタルで

【みんなが常に子育ての情報に触れている社会をつくる】

【提言⑧】 今日どこかに行けそうだと思うきっかけに、**#子育て情報一元化**

- ・子ども連れがゆっくり食事できる店舗情報やベビールーム等の情報の一覧化
- ・出産・育児に関する手当等、八戸市が行っている支援が簡単に見られるサイトの充実
- ・お出かけ情報を網羅したイベントカレンダーの整備
- ・子どもの年齢・人数・住んでいる場所などから行ける場所を検索・リコメンドできるサービスの構築
- ・親子で行くと割引になる「親子割」の導入

【提言⑨】 みんな読んでいる **#広報はちのへを子どもも読むメディアに**

- ・広報はちのへの発行回数の増
- ・広報はちのへに子育て情報を掲載
- ・市施設のイベント情報を大きく分かりやすく掲載
- ・高校への進学情報、キャリアプランニング情報、企業情報を掲載

【スマホで自然に、心地よくデザインされた情報に触れる】

【提言⑩】 親子がスマホを持つことが当たり前の時代、**#八戸市にデジタルで触れる** 体験を

- ・容易に閲覧できる子育て情報アプリの導入
- ・歩きながらポイントをためたり、周辺施設の情報が得られるアプリの導入
- ・若者や女性が興味あることに人を集めて、その情報を SNS で発信
- ・若者や女性（子育て世代）が市の取組を発信できる仕掛け作り
- ・中高生向け電子広報の導入
- ・行政手続きのデジタル化

【提言⑪】 デザインと編集のちからで **#八戸市に住む UX を設計** しよう

- ・八戸のブランディング、コンセプト策定、デザインの統一
- ・八戸市の編集・デザイン機能の拡充（デザイナーの雇用）
- ・広報はちのへ・市 HP・市公式 SNS・アプリ・デジタルメディア等、八戸市の広報について、ユーザーから見た時の統一性や連携性の向上
- ・観光の UX に加え、市民の UX をコンテンツ化して発信
- ・市職員や市民に対するデザイン・編集を学ぶ機会の提供

政策の柱3 「わたしが育ち、わたしが育てる18年」にあわせて、
中心街や街並みを再デザインする

【親子が集い、学ぶ場としての中心街へ】

【提言⑫】 教育機能・設備を集約し、**#親子で新しい何かを学ぶ中心街** へ

- ・ 保育施設、親・子の交流施設、塾、高等教育機関の拠点を誘致（教育イベントや学会の誘致）
- ・ 親子が気軽に集まれるフリースペースの設置とイベントの開催
- ・ 中心街にバスターミナルと駐輪場を作り、高校生の第三の勉強場所を用意
- ・ 学生の興味に応じたイベントやコミュニティ活動の奨励（IT・アート・起業・国際など）
- ・ 働く体験を学生に提供すべく、インターンやアルバイトの奨励

【提言⑬】 気配や予感を漂わせて、**#「何かやってらよ」がある中心街** を実現しよう

- ・ 中心街を身近に感じるイベントの開催
- ・ ホコテンと別の日曜日にもイベントの開催
- ・ 本八戸駅から中心街までのストリートでのイベントの開催
- ・ はっち・マチニワ・美術館等の設備の内容が分かるように、街にはみ出させ、知ってもらう仕掛け作り（美術館の外に目立つものを設置など）

【提言⑭】 車で、子連れで、赤ちゃん連れで。**#親子がぶらりと行ける中心街**

- ・ 駐場所の整備や送り迎えのための車止めの整備
- ・ 中心街にある駐車場の部分的無料実験や駐車場を活用したイベントの開催
- ・ 子どもの世話ができる場所やトイレの拡充と認知の向上
- ・ 赤ちゃん連れの親子が行ける施設整備
- ・ 雨の日でも濡れずに歩ける道、段差の修繕など、ユニバーサルデザインの徹底

【家の外にいる、まちに行く市民を増やす】

【提言⑮】 歩道を直し、季節に打ち克ち、**#歩く、まち行く市民に市民権を**

- ・ 歩道整備、通学路整備
- ・ 義務教育課程で、まちを歩く活動機会の増
- ・ 市民の自治活動による草刈りの促進
- ・ 冬場の雪で歩きにくい歩道や凍った歩道を改善する地域の取組への助成
- ・ 歩道の状況（管理者が異なる歩道も含め）を閲覧できる、道路情報サービスならぬ「歩道情報サービス」の整備

【提言⑯】市民で賑わっているから、**#子ども一人で遊びに行かせられる公園**になる

- ・ 駐車場がある公園の整備
- ・ クラウドファンディング等を活用し、公園の遊具等を整備
- ・ 公園を拠点とした市民活動への支援（ゲートボール以外にも）
- ・ 子育て世帯やお年寄りが公園に滞留してもらう仕掛け作り（活動支援など）
- ・ 八戸の自然を活かして公園化（海釣り公園、虫取り公園、ほたる公園など）

政策の柱4 「わたしが育ち、わたしが育てる18年」を大切に する意識をみんなで作る

【市民みんなが、すべての世代が、子どもファーストになる】

【提言⑰】忙しい親世代を助けたい！だから、**#祖父母の「孫かで」を促進**しよう

- ・ 祖父母が孫を連れて参加し、世話しながら子育てをするイベント・体験コンテンツの提供
- ・ 「スープの冷めない距離」に住む3世代の生活をコンテンツ化・周知
- ・ 祖父母世代と現代の子育ての仕方や違い等をまとめてコンテンツ化
- ・ 祖父母世代のメタボ・ロコモ・認知症等の予防につながる子育てアクティビティの提供
- ・ 祖父母世代と地域の保育施設・小中高校との接点の拡大

【提言⑱】組織・団体・企業を巻き込んで、**#子どもファースト**を推進しよう

- ・ 子どもファーストの推進・展開
- ・ 組織・団体・企業へ、子どもファーストへのスポンサー依頼・設備提供依頼
- ・ 高校生への支援やサポート、奨学金の返還支援
- ・ 若者の政治参画の場の提供と、子どもファーストへの理解促進
- ・ 屋内での遊び場（ラウンドワンなど）の誘致について、民間へ依頼・補助

【地域・圏域での連帯】

【提言⑲】デジタルで、イベントで、**#若者が自然と町内会に入る流れ**を実現しよう

- ・ 町内会活動に若者の視点を取り入れ、回覧板もデジタル化
- ・ 自治とは？公民館とは？生活館とは？自治を解説するコンテンツの作成
- ・ 若者向けのイベント立案（子ども会、BBQなど）、祭りへの参加促進
- ・ 町内会とPTAの連携（地学連携で取組例あり）

【提言⑳】圏域の人と経済をつなぎ、**#市民が圏域住民と関係する**手助けを

- ・ 8市町村を集めた祭り、子どものお泊り会、キャンプ大会などの実施
- ・ 体験提供のフィールドとしての8市町村の連携（地域留学など）
- ・ 圏域クーポン、圏域通貨、圏域ポイントカード等の導入

八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議 委員名簿

(任期：令和4年4月～令和6年3月)

敬称略：五十音順

	氏 名	備 考
1	秋田 音々香	公募
2	井上 丹	八戸学院大学 講師
3	(副会長) 川守田 礼子	八戸工業大学 准教授
4	工藤 恵之助	八戸青年会議所 理事長
5	(会長) 玉樹 真一郎	NPO 法人プラットフォームあおもり 副理事長
6	中村 知行	八戸商工会議所青年部 会長
7	中屋敷 蓉子	八戸 IT・テレマーケティング未来創造協議会 幹事 (リゲイン株式会社)
8	泥濤 真理子	女性チャレンジ講座第9期修了生 (株式会社フォーリウム)
9	三浦 千秋	青い森信用金庫 地域支援室
10	山本 歩	八戸工業高等専門学校 准教授